

# 日本語の危機

草川 昇

## その一 日本語は将来滅びるのか

あまりにも唐突な題名をつけたのには、それなりの理由がある。自分の力ではどうすることもできない、重苦しい何かに押しつぶされそうな感じが日々頭から去らない。

それは、平成十年七月二十九日、昭和女子大学で開催された文化庁主催の討論会に参加してからのことである。毎年一回開催される文化庁主催の、日本語教育に関する問題提起と討論会に久しぶりに参加した。

文化庁長官、村田秀樹氏の開催あいさつ、係官の基調報告に引き続いて行われたパネルディスカッションのテーマが、「日本語の将来を考える―地域社会の国際化に対応して―」という長いもの。

コーディネーターは、国立国語研究所長の水谷修氏、パネリストが四人でトップバッターが評論家として著名な加藤周一氏、二番手が韓国人で上智大学助教授の、イ・ヨンスク女史、次が学習院大学教授で方言研究で知られた徳川宗賢氏、最後が日本語教育一筋の、東京女子大学教授、西原鈴子氏という豪華メンバー。一人約三十分の持ち時間で主張を展開。

加藤周一氏、開口一番「日本語は将来滅びると思う。英語が共通語になるだろう。フランス語もドイツ語も滅びると思う。フランス語については、そのことを首相が心配している。…日本語は単に、地域言語の一つになってしまう

だろう」：（次々と加藤氏は論を展開していく）「日本語は将来滅びると思う」という一言に会場の約七百人の目は一齐に加藤氏に注がれた。

しずまりかえって誰も咳一つしない。隣席のイ・ヨンスク女史が厳しい目（抗議の目）を加藤氏に向けたのが印象的だった。

イ・ヨンスク女史は発言の冒頭、「私は加藤先生の発言には賛成できません。日本の歴史、日本語を研究し、日本語研究を生涯の仕事としてきただけに納得できません：」と真剣勝負の構え。

四人の持ち時間が終了し、残されたのは各パネリストの補足説明のみ。その補足説明で、加藤氏は次の三点を挙げて自説を締め括った。

一、日本の学会を見ると、日本語に対する意識がわかる。国語学の研究を長年続けている唯一の専門雑誌「国語学」のページ数の約三分の二が横書きである。文献紹介に横文字が激増している。

二、医学会では、日本語の論文は通用しない。英語の論文でないと問題にならない。

三、企業名に片仮名が年々ふえている。つまり、漢字離れである。

これらは、まさに日本語を放棄しようとする一つの表れである。

最後に「私が生きている間は日本語は滅びないだろうけど」と苦笑い。この時、会場ははじめて一瞬笑いの声がかみ。因みに加藤氏は八十歳近い。

一言も聞きもらすまいと真剣に聞き入っていた私は、大きな疲労感というか、倦怠感におそわれ、暫し言葉がなかった。

日本語は複雑で、面倒な点も多いが、日本語ほど多義性に富む言語は他にあるまいと思ひ込んでいただけに、シヨックは大きかった。膨大な数の漢字の運命はどうなるのか。便利な平仮名もいづれ姿を消すのだろうかと暗い谷底へ突

き落とされたような気になった。

次の瞬間、多くの漢字一つ一つが声なき反論に立ち上がる光景を想像した。現在、学校教育で使用されている漢字は、正確にいうと、一千九百四十五字（常用漢字）で、僅かなものだ。漢字の総数は、漢字の本来本元の中国で早くから出版されている『康熙字典』では四万八千六百四十一字。諸橋轍次博士が何十年という年月をかけて完成した『大漢和辞典』は実に四万九千九百六十四字を登録しているのである。更に、日本人の作った国字が、一千五百五十三字を数えるのである。それに個性ある平仮名、片仮名が各五十ずつ。英語のアルファベットは僅か二十六文字に過ぎず、一つ一つの文字は意味を持たないではないか。一例をあげれば、「私」はアイ（I）一語のみ。日本語では、わたくし、わたし、ぼく、自分、おれ、小生、吾輩、拙者など、方言表現も加えれば百以上を数えることができる。二人称、三人称も然りで、日本語の表現は実に豊かなものである。複雑で面倒であり、特に外国人にとっては、日本語はむずかしいが、一つ一つの語に味があるので、英語なんかには負けてたまるかと力みたくなる。

しかし、現実はどうか。加藤氏の心配を肯定せざるをえない点が多いのも確かだ。加藤氏の挙げた三番目の企業名にしても、なぜ漢字離れを好むのかと疑いたくなる。

マルハ、きんでん、グリコ、ホーネン、トヨタ、グンゼ、ソニー、ナイガイ、アキレス、オークマ、コマツ、イビデン、ヤマハ、ミズノ、ジャスコ、オリコ、コスモ、等々、百社ほど数えたら頭が痛くなった。全企業の四分の一以上が片仮名名なのである。なぜ、日本独特の名称を捨てた企業が多いのか。加藤氏の心配の一つが現実になっているのである。よく考えてみると、唯一の例外が大相撲のしこ名ではなかるうか。

日本語を大切にしている筈の、当日の研究会でも、パネルディスカッション、テーマ、コーディネーター、パネリスト等の名称を使っているのは、日本語はすたれていく手助けをしているように思えてならない。

元厚生大臣の小泉純一郎氏（現総理大臣）が、役所で使用する用語に、あまりにも片仮名（つまり外来語）が多すぎ

るので思いきつて整理するように事務方に異例の指示をしたことが新聞紙上で紹介されたのを思い出した。

もつと日本人としての誇りを持つべきだ。日本語を滅びさせてはならない。地域語の一つに格下げしてはならない。といささか感情的に、強く訴えたい。

## その二 野放しの日本語

『野放しの日本語』という、座りの悪い題名を敢えて付けることにした。「言葉の乱れ」のような題名では生温いのである。

日本語は病んでいるというように言われたのは、もうかなり前のことである。『日本語八つ当り』（江國滋著、新潮社）が出版されたのは平成二年で、江國氏は日本語の持つ盲点を鋭い筆致で衝いた。『日本語表と裏』（森本哲郎著、新潮文庫）で、森本氏は日本語の持つあいまいさを多くの例をあげて見事に論証した。『日本語これでいいのか』などの著書が次々と出版され、ごく最近では『日本語は生き残れるか』（井上史雄著、PHP新書）という危機的な書物まで出版されるに至った。

経済大国日本といわれたのは、すでに過去のこと、日本の実力はかなり低下したということについて、先日の新聞が報じていた。ヨーロッパの殆んどの先進国に先を越され、辛うじてイタリヤの一つ上に位置しているに過ぎない云云ということだった。皮肉にも、このことと呼応するかの如く、日本語の地位低下の現状を嘆かざるをえない。

先にあげた井上史雄氏著の『日本語は生き残れるか』について、慶応大学教授の池尾和人氏は『国際化で地位低下、肩身狭く』の見出しで、日本語をめぐる状況が、「ことばのしくみ」と「言語の社会的地位」の二つの観点から、ますます国際化が進むにつれて英語が優位に立ち、日本語を含む英語以外の言語の地位は低下している。（中略）「英語第二公用語論」を採用すれば、日本語の衰退を加速するだけになりかねない云云と言って、日本語の地位低下

を嘆いている。

野放しになつてゐる日本語の例をあげればきりがないが、最近の特徴的なものをあげることにする。

「ノリを楽しむ若者のことば遊び・好つきやねん若者語：女子大生のことばを中心に一一五〇語、語源や意味と類義語・関連語を示し、ノリのいい関西弁の会話例が抜群に面白い」というのは『若者ことば辞典』（米川明彦著・東京堂出版）の帯に示してある文章である。著者自身の序文からは若者ことばについての警告なり、反省の弁は見当たらない。終わりの「若者ことば考」の最後のところで申し訳程度に、ほんの僅か（数行）批判めいた説明があるに過ぎない。この辞典を批判的に読む人が多いことを祈りたいほどである。

ひところ、といつてもずいぶん前から若者（女子が多い）が「…だから」「そして」などと変に語を伸ばして話す事例が多く、年輩者を中心に「今の若い者は変な言い方をする。聞き苦しい」という声をよく耳にした。いつの間にか慣れつこになつてしまつたのか、さほど気にしなくなつてしまつていたが、最近また、ますますひどくなつてきた。先ほど挙げた二例のほかにも「またー」「でもさー」「でもよー」「つまらんわー」など、こんどは女子中学生、女子高校生が主役といった感じで以上のような奇妙な言い方（伸ばし方）が多用されている。バスや電車の中で多く耳にし、煩わしくなるが、かといつて知らない生徒に注意するわけにもいかず、不愉快な思いをしている。

スポーツ番組を見ていて、インタビュウを受けた勝利チームの某監督が「勝利をほぼテエチュウ（手中）に収めて…」と言つていた。「ここで事実をボウロ（暴露）すると…」「回答のユウム（有無）を早く…」「そのことをもつとギシユク（凝縮）して考えると…」「どんなによく考えてもメンサイ（詳細）がわからない」など、ほとんどが民放のアナウンサーか、キャスターの誤つた例である。政治家の誤つた言い方、誤読も気になる。

福田内閣官房長官が去る八月十三日に、小泉総理の靖国神社参拝に関する主旨説明文を読み上げた中に明らかな誤読箇所が一箇所あつた。NHKでも民放でも数回同じ録画部分を放映していたが、気になつて仕方がなかつた。メモ

するのを忘れたので肝心のその箇所を思い出せないのが残念である。

もう一年ほど前（実際はもつと前？）になるが、店で買い物をして、レジで「一万円からお預かりします」と言われて、おやと驚いた。その後度重なり、変な言い方はやったものだと思いつつも、最近では驚かなくなった。慣れるということは恐ろしいものだ実感していた矢先、書店で一冊の書物代七九八円を請求され、きつちりその額を渡したところ「丁度からお預かりします」と言われ、これにはびつくりしてその店員の顔をよく見てしまった。ここまです来たかの思いである。

もう一つ、気になるのは「私的」という語の乱発である。「常識的に判断すると」「科学的に考えた場合」などと言うのが普通だが、最近では「私的には…」「君的には…」など極端例として「先生的にはどう考えますか」などがあげられる。この「私的」という言い方を変な表現法（表現法といえるか甚だ疑問だが）もあるものだと気づいてメモしておいたのが、次の一文である。平成十三年二月十四日のテレビニュースの一部でサッカーで名を馳せた三浦選手が「私的には、大体からだのつくりは出来上がったと思っている。…」最後に信じられないような事実を一つ。

親しくしている某短期大学（女子学生のみ）の助教授から直接聞いた話。

「うちの学生の中に片仮名も満足に書けない者が何人かいるんですよ。小学生なみで困り果てている。…」ただただ、啞然とするばかりで、「本当？」と聞き返してしまった。